
っポイ！（高校生編）

わのだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

っポイ！（高校生編）

【Nコード】

N5448Q

【作者名】

わのだ

【あらすじ】

原作終了後の平と雛姫の恋愛過程を連載予定。

最終回、お互いの気持ちを伝えることなく付き合うことになった二人。

雛姫の中にある真への罪悪感、平が感じる身長へのコンプレックス。

二人の高校生活の様子も含め、晴れて恋人らしくなっていく過程を書く予定です。

1 高校生活（平編）

新しい制服に身を包み、気分も晴々として思わず鼻歌が漏れてしまう。

天野平、彼は高校受験合格を勝ち取り、晴れて新高校一年生となった一人である。そんな彼を迎えにきたのは、彼の幼なじみである日下万里。

「平、準備できたか？」「おう、今行く！」

二人はそんなやりとりをしながら、平の家を出た。

「平…お前なんでそんなうかれてるんだ…」

登校中、幼なじみのにやけた顔に呆れた万里が声をかけた。

「フッフ…なんか新しい制服を着ると自分が高校生になった実感がさ。それに万里驚くなよ！」

平は自信満々に目を輝かせて言う。「何だよ。一ノ瀬とキスでもしたのか？」と万里の色恋沙汰の一言で一気に吹き出した。

「ち、ち、ち、違う！身長が伸びたんだ！俺今155ダゼ！」

と、真っ赤になりながら言う台詞はかなりほほえましい。

平はずっと片想いだった少女がいて、最近付き合うことになった。

彼女の名前は一ノ瀬雛姫。

身長は平とさほど変わらず、華奢で美少女と噂される人物である。平も一見美少女と間違われるほど、非常にかわいらしい顔をしており、男性からのファンは後をたたない。だから、彼は身長が低い自分コンプレックスを持っていて、雛姫にだけは負けたくないのがある。

「ふーん」

万里はあまり彼の言った傲慢に驚きもせずただ相槌をうった。

平はそんな万里の反応に腹立たった。

「なんだよその反応！もつと驚けよな」

「いや、前からお前の身長が伸びてるのくらいわかってたからあえて驚くことじゃないと」

万里は平の頭をくしゃくしゃとなでながら含み笑いをこらえて言った。

「お前はまだまだ伸びるよ」と言って、平の頭をぼんと叩いて歩くだす親友に、平はニヤニヤ笑いをこらえて後をおいかけた。

その後すぐに「まあ俺には到底敵わないだろうがな」と言った親友の一言に真っ赤になって追い掛ける姿は高校生になっても変わらない、二人のほほえましい姿だった。

2 高校生活（雛姫編）

「はぁ」大きなため息をつき、ふわふわと柔らかい髪を春風になびかせ、一人の少女が駅のホームに佇んでいる。

彼女の名前は一ノ瀬雛姫。

小柄で華奢な身体に、かわいらしい容姿を兼ね備えていて、街を歩くと思わず彼女を振り返ってみてしまふ、そんな少女である。

一つ大きなため息をつく、後ろから彼女の親友が声をかけた。

「おはようヒナ。朝からデッサンのため息ついてどうした？ 幸せが逃げるぞ？」

彼女の親友は相模真。彼女は雛姫とは違ったタイプの美少女である。すらっとした身長に細身の身体。

雛姫が可愛いと言うならば、彼女は美人というタイプである。

二人がそろって歩くと、必ず2、3回はナンパにあってしまうくらいだ。

「あ、真おはよう！」

雛姫は真に声をかけられて、自分がため息をついてたことに気がついた。

雛姫は真が「幸せ」と言った言葉に、チクリと心が痛んだ。

雛姫と真は同じ人を好きになった。

お互い大好きな親友を想う一方、好きな人を想う気持ちはふくらん

でしまい、真は正直でストレートの性格なだけに彼に告白をしてしまう。

でも彼は真を選ばなかった。

彼は雛姫のことが好きだったのだ。

彼の名前は天野平、二人の同級生であり、雛姫のことがずっと好きでったのだ。

一方雛姫も平のことが好きで、雛姫は平のことを好きな真との間で揺れたが、自分の気持ちとようやく向き合つことができ、中学最後の日、平から「付き合おうか」という言葉をきっかけに二人は付き合うことができたのだ。

そんな幸せ絶頂の雛姫にはため息なんか似合わないはずであるが、彼女の心境は芳しくないようである。

「なんだ？天野とうまくいつてないのか？」

さりげない真の台詞に雛姫はまたチクリと心に針がささる。

真は嫌みでそういったことを言う人間ではない。

本当に雛姫を心配しているのだ。だからこそより一層心が痛むのだ。

「天野とちゃんと会ってるのか？ただでさえ学校違うから会う機会減ったんじゃないか？」

真の言うとおりである。学校が違うから、平と付き合ってるとはいえ、全然会っていないのだ。

高校生活始まって一ヶ月はたつが、会ったのは二週間前に一度デートしたくらいだ。

デートとは言っても、二人とも始終ぎこちない形で終わってしまったが、雛姫にとっては会えたことが嬉しかったからそれでよかったのだ。

一方その反面、真への申し訳なさが心を悩ませる。

「あ、会ってはあまりいいかな……。でも大丈夫だから！あ、昨日の番組みた？」

雛姫は少しでもこの話題を避けたいからあまり関係ない話題を出して話をそらすとする。

真はそんな雛姫の行動はおみとおしである。

一つ小さくため息をつく、真は雛姫に話を合わせ、二人は学校へ向かった。

3 高校生活（平編2）

昼休み、万里と平、鷹岡、花島田は早々と昼ご飯食べ終わると、バスケをしに行こうとした矢先、いきなり万里の携帯から電話がなった。

「やべ、マナーにすんの忘れてた」と慌てて着信相手を見ると珍しい人物に目を丸くする。

「なんだよプレイボーイ君。また新しい女か？」と皆たいして興味なさそうに言って、先に裏庭にむかった。

「珍しいね、デートお誘い？」

と万里が言くと、何やら相手の女性は怒ったようで万里はおもしろがって笑った。

「で、どうしたんだ相模？」

- - - - -

「万里電話長引いたんだな。誰からだったんだ？」

バスケをして一汗かいた平は、結局昼休みに現れなかった幼なじみに言った。

「な・い・しよ」

万里は語尾にハートをつけて平をからかう口調で答たので、平はむっとした顔で「はいはい」と言って促した。

その時、後ろから二人に声をかける人物がいた。

「なな、平、万里。隣街の女子高にすっげー美少女二人がいるんだ

けど、調べたらなんとお前らと同じ中学ってわかったんだ！メルアドとかしらん？」
興奮して話かける男は、いかにも女の子大好きで口も軽い人間である。

平は彼に「田中、肝心の名前がなかったぞ。」と答えた。

平は何だか嫌な予感がした。美少女二人組で女子高というと思い付くのは彼女らしいない。

「確か、一ノ瀬と相模だったな」と田中の横にいた大人しそうだが、いかにも好青年男児が顔を赤くして答える。

その予想できた答えに平はガクリとする。

平は『一ノ瀬は俺の彼女だ』と大きな声で二人に怒鳴りたいのに声が出ない。自分に自信がないからだろうか。

「あ、そうだ！お前らならできそうだし、合コンセッティングしてくれよ」と厚かましく田中が言う。

「え、ちよつ、まっ」

平が断ろうとした瞬間、

先生が教室に入ってきたため、二人は「よろしく」と言って笑顔で立ち去って行った。

平は田中と井上の言葉に啞然として固まってしまった。

先生の英語の授業は全く頭に入らない。安心して平のコメカミにコッソと何かが当たった。

平は丸まった紙を広げて読むと、綺麗な字で『合コンするの?』と書かれていた。

平は『するわけないだろ』とミミズねような乱雑な字で隣の幼なじみになげかえす。

ニヤニヤと笑う万里は、何かを書きこむと再度平に投げた。

平はガビガビした気分で紙を乱暴にあけると、そこには

『最近ヒナが元気ない。日下は何か知ってるか? たぶん天野絡みだと思う。聞けばヒナはちゃんと好きと言われてないみたいだし、会ってもいないじゃないか! 私はヒナを悲しませるようなら天野を許さない。果たし状を持っていくからな! 天野携帯ないからそう伝えとけ! プツ。ツー、ツー。↑以上相模からの昼のメッセージ』

とご丁寧に電話を怒って切る状況まで記載されていた。

平は怒りの気持ちから、どんどん青ざめていく様子が自分でも感じられた。さらにそんな平に紙が万里から飛んできたから、平は反射的にゆっくりした動作でその紙を開いた。

するとそこには『一ノ瀬は毎週水曜日の7時までピアノの稽古に行ってるんだって。今日は何曜日だったけなー』

という文字。「万里その場所どこだ?!」平はその文字に意識を取り戻し、思わず万里に叫んでしまった。

「天野くん…」とブルブルと怒りで震えながら教科書持つ英語教師

が平に声をかける。

「げっ」と自分のやってしまった行動に思わず声をだす。万里はそんな平にぼそりと「バカ」と言った。

今日がその水曜日。

4 高校生活（雛姫編2）

「雛姫ちゃん、どこ弾いてるのかなあ」

優しくではあるが、少し怒り気味の口調に、雛姫は我に返った。

「ご、ごめんなさい」雛姫は先生に謝り楽譜をペラペラとめくり返す。

「最近ちよつと変ね。何か悩み事かな？まあ雛姫ちゃんがやりたいようにやりなさい。楽しくピアノを弾くのが一番の目標なんだから」

先生の言葉に、雛姫は少泣きたい気持ちをぐつとこらえた。

あの時とは違う気持ち。平が自分のことを好きかもしれないという話を真から聞いた時。

あの時は嬉しくて、でもどうしたらいいのかわからなくて。

平と両思いだったら嬉しい。でも真のことは？

そういった、ハラハラしてぎゅつと自分の胸を締め付けるような、嬉し恥ずかしい気持ちが大半だった。

その後、平に突然キスされて、彼が好きな気持ちがわからなくなったが、平がいなくなるかもしれない、死ぬかもしれないと思った時、本当の自分の気持ちが見えた。

無我夢中で事故現場に走った時は、真のことも忘れてた。

ただ、彼がいなくなったら…そんなの嫌だ。その時にやっと彼が掛け替えのない人だとわかったのだ。

それは初恋に恋い焦がれていた時のウキウキわくわくした気持ちではなかった。

心から、彼への恋心を感じた瞬間だった。

それから、彼が付き合つてくれたので、今二人は晴れて恋人関係になった。

しかし、雛姫は不安だった。

平は自分にキスをしてしまった罪悪感から、付き合つたのではないのか。

本当は真の方がよかったのではないのか。

真は自分と平をとればいいと言ってくれたけど、本当は辛く傷ついているのではないのか。

そういつた気持ち溢れて止まらない。

そもそも付き合つていうのはどういう意味??

自分でもどうすればいいかわからない。解決するのは自分しかないのに。

ピアノが終わり、挨拶をすますと雛姫は悶々とした気持ちでピアノ教室のビルを出た。

外の空気は少し肌寒い感じがした。高校に入学して約1ヶ月と少し前と何もかわらない生活だと思っていたのに、やっぱりどこかぎこちない。誰も悪くない。けど真への罪悪感が心を埋めてしまうのだ。

雛姫は下を向いていた顔を持ち上げると、そこには予想外の人物が

ビルの前に立っていたことに気づいた。

「あ、天野くん……」雛姫が目を丸くして言うと、平は彼女に向かって「うす」と言って挨拶をした。

5 高校生活

「はい」平は雛姫に自動販売機で買ったジュースを手渡し、雛姫はお礼を言って受け取ると、二人は近くの公園のベンチに座った。

「天野くん、今日はどうしたの？」

「ん、あんまり会う時間ないし…夜遅いから…これから迎えに行く」

平はぶつきらばうに答えると、雛姫はその言葉が嬉しくなって顔が赤くなるのがわかった。

ぼそりと俯きながら「嬉しい」と言うと平も雛姫の赤面が伝染して赤くなった。

「よくわかったね？ピアノ教室の場所」

「万里に聞いたんだ。なんであいつ知ってるんだろうな…」

二人は自分の高校の話、友人の話など他愛もない会話をして、徐々に雛姫の家に向かって歩いて行くと、あっというまに雛姫がの家に着いてしまった。

平は今日雛姫に会って言いたい一言をいつ言い出したらいいかわからず、結局別れの時間になってしまった。

雛姫は「今日はありがとう。嬉しかった」と言うと、平はさっきからでかかっている言葉を伝える勇気が湧いた。

「一ノ瀬、何か悩みある？最近変だって聞いたから…もしかしたら

俺のせいかと思って…」

平は最後の部分を一生懸命震える声を我慢して伝えた。雛姫は、一瞬びっくりして、その言葉の意味をよく考えてみた。きつと心配した真が言ったのかもしれない。そんな真の優しさに、思わず涙が出そうになる。でも平にも心配させたくない。

「大丈夫だよ」と笑って伝えることしかできなかった。

平は少し寂しそうに「そか」と言うと、「じゃあまた」と言って自分の家の方向に向きを変えた。

雛姫は、立ち去る平の姿をみると、なぜか我慢していた涙がぼろぼろと落ちてきた。

「ほんとは…」

後ろから聞こえる半ば叫ぶような声に驚いて平は振りかえると、そこにはぼろぼろと涙を流し、目を真っ赤にして雛姫が立っていたのだ。

平は慌てて雛姫に近づくと、雛姫はぼつりぼつりと話しを始めた。

「ほんとは、不安なの。真の優しさに甘える自分が嫌い。真も天野くんも大好きなの。天野くんとかうやって会えて幸せで、二人でどこかへ行くことが嬉しくて。でも真への罪悪感と幸せを感じる醜い自分が大嫌い。でも二人とも大好きなの。掛け替えのない人なの。天野くんが私を選んだことが間違いであつても、私はそれでも天野くんと一緒にいたい…」

雛姫は一度話始めた心の叫びを止めることができなかった。

流れ落ちる涙を必死に袖でぬぐいながら、彼女は嗚咽をこらえていた。

すると雛姫はぐいっと前に引つ張られ、平に抱き寄せられた。

平は自分のことをこんなにも想ってくれる彼女が愛しくて、これ以上泣いてほしくなくて、思わず抱き寄せてしまったのだ。

「俺は一ノ瀬がずっと好きだったんだ。相模に告白されて、付き合いあってなんだろうって考えた時、好きな人じゃない人と付き合えないし、相手にも悪いって思ったんだ。」

俺は一ノ瀬じゃないとやっぱり駄目だった。ごめんな。一ノ瀬と相模が仲良いのも知ってるけど、俺はやっぱり一ノ瀬がいいんだ。ずっと、ずっと好きだったんだ。」

雛姫は平が言う言葉の一言一言を受け止めた。

自分はやっぱり天野平という人物が好きだ。親友が彼を好きだと知っても諦めきれなかった恋心。

この罪悪感を感じながらこの人と一緒にいようと心から感じたのだった。

始めて平から好きだという言葉が聞けて、嬉しくて涙が止まらない。平に抱き寄せられたまま彼の胸で嗚咽を堪えながら、涙を流す。

平もまた知らなかった。彼女がこんなにも自分のことを好きでいてくれることを。

二人は、この時ようやくお互いの気持ちを確認できたのかもしれない。

お互いの気持ちを言葉にしないまま「付き合おっか」の一言で付き合ってしまった二人だからこそ、すれ違ったのかもしれない。

雛姫は身体を平から少し離すと、涙でボロボロの目を平に向けた。

平は愛しくてたまらない、そんな彼女の涙を指でぬぐいながら、そっと顔を近づけ、二人の唇がかさなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5448q/>

っポイ！（高校生編）

2011年2月6日06時36分発行